

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22510254

研究課題名（和文） 帝国とメッカ巡礼：ロシアのムスリム地域の視点から（1865－1914）

研究課題名（英文） Empire and the Hajj: A View from Russia's Muslim Regions, 1865-1914

研究代表者

長縄 宣博（NAGANAWA NORIHIRO）

北海道大学・スラブ研究センター・准教授

研究者番号：30451389

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ロシア帝政末期のメッカ巡礼をめぐる政治を扱った。その際、ヴォルガ川とウラル山脈に挟まれた地域のムスリム社会に着目し、国際規範や地政学などのグローバルな文脈、帝国の政策立案過程、ローカルな共同体での巡礼者の位相という三層の相関を分析した。その国際的な成果は、ロシア・イスラーム研究と中東研究との非対称性を克服し、帝国論、中央ユーラシア研究、イスラーム地域研究との対話を促すことに貢献した。

研究成果の概要（英文）：

This research addresses the politics surrounding the hajj in late imperial Russia, focusing on the Muslim community between the Volga Basin and the Ural mountains. For the analytical purpose, it divided the politics into three domains, examining the dynamics of their interactions: the geopolitical domain encompassing international norms and great power rivalry, the Russian state's policy-making procedure, and the local Muslim politics around the hajjis. This project produced internationally recognized works that bridged the gulf between the study of Islam in Russia and the Middle East Study and facilitated dialogs among students of empire, Central Eurasia, and Islamic Area Studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：ロシア イスラーム 帝国 世界史 東洋史 西洋史

1. 研究開始当初の背景

現在、ロシア連邦には人口の1割強に相当する2000万人のムスリムがいるといわれ、メッカ巡礼者の数は、ソ連崩壊前後から急速に増加した。1945年以降、ソ連は外交使節として20名ほどをメッカに送っていた。

1990年にサウジアラビアと国交が回復すると、1500人のソ連人が巡礼を行った。2000年には、ロシア連邦からだけで巡礼者は3000人を超え、現在では2万人強に達している。

メッカ巡礼には、交通網の整備、旅行会社との協力、巡礼者枠の配分、衛生、保険など

の側面、国家権力が深く介入している。しかもそこでは、ムスリムの官僚や宗教指導者が枢要な役割を演じている。加えて、メッカ巡礼への国家の配慮は、外交上も重要な意味を持っている。

本研究の射程にある 20 世紀初頭には、毎年約 2 万人のロシア臣民がメッカを訪れたと推計されている。しかし、これまでロシア研究者は、ムスリムの国境を超える移動性と国家機構との相互関係を十分に解明してこなかった。中東研究者も概して、越境するムスリムにイスラーム共同体（ウンマ）への志向を読み取ろうとしてきた。しかし、過去十年で、Robert Crews や D. Iu. Arapov らによって、ロシア帝国とムスリム社会が相互依存していた側面が解明されるに至り、最近ようやく Michael Reynolds、Eileen Kane、James Meyer らによって、国境を超えるムスリムの移動に、国家とムスリムとの入り組んだ交渉が見出せることが明らかになりつつある。

2. 研究の目的

本研究は、帝政ロシアのメッカ巡礼者を対象とする。そして、巡礼をめぐる政治が展開される場として、グローバルな層、国家の層、ローカルな層を想定し、それぞれの相関を分析した。それは、ロシア研究と中東研究を融合させて、近代の世界秩序の形成に関する知見に新しいパラダイムを提示する意義を有する。本研究は、ロシア・イスラーム研究と中東研究の非対称性の克服を目指す点で、地域間比較の方法論にも貢献する。さらに、帝国論、中央ユーラシア研究、イスラーム地域研究など様々な研究プロジェクトとも連結し、他分野間の対話を促す触媒としての役割も果たすことを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、ロシア・ムスリムのメッカ巡礼の動態をグローバル、国家、ローカルの各層の相関の中で位置付けた。ローカルな層としては、ヴォルガ川とウラル山脈に挟まれた地域のムスリム社会にとくに注目した。分析の際には、相対的に進んでいる、他の帝国からの巡礼者に関する研究も参照した。これは、各帝国が互いに参照し合うことで形成された当時の国際秩序を理解するにも有効である。本研究は、新しい研究領域の開拓を目的としたので、文書館を中心に、未公刊史料を博搜した。また、グローバルな層とローカルな層をつなぐ視座を持つために、地方の文書館や図書館に所蔵されているムスリムの言葉で書かれた史料も収集した。本研究では、関連する欧米露の研究者と協力しながら、成果を積極的に海外に発信した。

4. 研究成果

(1) 22 年度

既述のように、本研究は帝国論、中央ユーラシア研究、イスラーム地域研究など様々な研究プロジェクトとの連動を企図していたが、22 年度はこの点で著しい成果が見られた。5 月には、フランスの研究者がヴォルガ・ウラル地域の多宗教に関する国際会議をニジニ・ノヴゴロドで組織し、そこに招待された。7 月には、フランスとアメリカの研究者と協力して、国際中東欧研究学会 (ICCEES) の世界大会で、宗教とナショナリズムに関するパネルを組織した。11 月には、研究代表者自身がアメリカの気鋭の研究者に呼びかけて、北米のスラヴ・ユーラシア学会 (ASEEES) で、ロシア帝国の建設・運営における非ロシア人の仲介者の役割に着目した Building the Russian Empire: A View from the Ground Floor というパネルを組織し、立ち見の出るほどの聴衆を集め、大いに議論を喚起した。12 月には、人間文化研究機構のプログラム「イスラーム地域研究」の第 3 回国際会議でも報告する機会が与えられた。そこで出会ったフランスの研究者とは、今後、メッカ巡礼の共同研究をすることになった。

22 年度の資料調査としては、前述のニジニ・ノヴゴロドでの会議の際に、カザンに立寄って、カザン大学図書館の稀少本・手稿部で史料収集を行った。また、モスクワでは二度、国立図書館分館（ヒムキ）で、帝政期のタタール語文献コレクションの調査を行い、本研究に関連する博士論文を閲覧した。とりわけ、カザンとモスクワで集めたタタール語文献は、従来ほとんど知られていないものである。これらを読んでみると、メッカ巡礼が欧露のムスリム社会に与えた知的な影響がこれまで考えられていたよりもずっと深いことが分かった。

(2) 23 年度

23 年度は、ロシア帝国の内務省が人間の移動をめぐる国際規範と国内のムスリム行政の要請にどのように対処しようとしたのかを解明する点で成果が上がった。それは 12 月に、サンクトペテルブルグのロシア国立歴史文書館 (RGIA) での資料収集が実現したからである。そこでは、内務省の中にあり、帝国の非ロシア正教徒の行政を統轄した外国信仰宗務局 (f. 821)、20 世紀初頭に黒海の港から紅海まで巡礼者を運んだ義勇艦隊 (f. 98)、巡礼者が伝達しているとみなされたコレラの防疫に取り組んでいた医療監視主任局 (f. 1298) の文書を閲覧した。

また、8 月には大英図書館の India Office Records で資料調査を行う機会を得た。その際、1920 年代にソ連がアラビア半島に関与していく戦略、とりわけ、中央アジアで経験を積んだムスリム官僚を外交官に登用したり、

列強との競合の中で汽船ルートを開拓したりしているところに、帝政末期との強い連続性を見出すことができた。このテーマは、将来も深めていきたい。

国際的な共同研究でも二つの重要な成果があった。第一に、ロシアとその南部国境地帯のイスラーム研究で指導的な立場にあるスタンフォード大学の Robert Crews が南アジア研究者と協力して組織したワークショップに招待されたことである。そして第二に、フランスの著名な研究者2名を編者に迎えた論文集『中央アジアの巡礼者たち』に、拙稿が採用され、出版されたことである。

(3) 24年度

最終年度は、国家とグローバルな展開がどのようにメッカ巡礼の動態に作用していたのかを巡礼者の目線から把握すべく努めた。これまでカザンとモスクワで収集してきたタタール語の巡礼記、人物伝、地方史を分析すると、1860年代頃から、イスラーム学者の従来の留学先としてのブハラがその座をメッカ・メディナ、イスタンブルに徐々に譲っていくパターンが読み取れる。その背景にはまず、ロシア帝国の交通網がグローバルなそれと結合し、巡礼が格段に容易になったことがある。そして、ロシア帝国自体が近代化する中で、その教育制度に十分に統合されていないムスリムが、オスマン帝国の新式学校やカイロ、メッカ、メディナでのイスラーム諸学の新しい展開から、近代に適応する術を学ぼうとしたことがあった。これらの点は、次年度中に論文にまとめる予定である。

本研究は、帝政期のメッカ巡礼に焦点を絞ってきたが、巡礼は過去から現在まで持続的に繰り返される儀礼でもある。したがって、相互補完的な国内の共同研究との兼ね合いで、帝政期の研究で得られた知見を活かしながら、ソ連時代と現代ロシアにまで研究の射程を広げた。7月に行われたスラブ研究センターの夏期国際シンポジウムでは、現代ロシアのメッカ巡礼について報告した。11月には北米のスラブ学会 (ASEEES) で、Revolutions across Imperial Borders: Diplomacy and Local Politics in the Early Twentieth Century というパネルを組織した。そこでは、1920-30年代のソ連による紅海への進出という文脈で、メッカ巡礼の政治的・経済的な意義について考察する報告を行なった。この企画では、Willard Sunderland や Adeeb Khalid という指導的な研究者の協力を仰いだだけでなく、聴衆の中にいた Samuel J. Hirst と今後の共同研究の可能性を話し合えた上でも極めて有益だった。日本語では、帝政末期から現代にかけてのロシアのメッカ巡礼を概観する論考も執筆することができ、次年度中に出版予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① 長縄宣博「近代帝国の統治とイスラームの相互連関：ロシア帝国の場合」秋田茂、桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、2013年、158-184頁。査読無

② 長縄宣博「ロシア・ムスリムがみた20世紀初頭のオスマン帝国：ファーティフ・ケリミー『イスタンブルの手紙』を読む」中嶋毅編『新史料で読むロシア史』山川出版社、2013年、92-110頁。査読無

③ 長縄宣博「総力戦のなかのムスリム社会と公共圏：20世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域を中心に」塩川伸明、小松久男、沼野充義、松井康浩編『ユーラシア世界5公共圏と親密圏』東京大学出版会、2012年、71-96頁。査読無

④ Norihiro Naganawa, “Mekteb ili shkola? Vvedenie vseobshchego obucheniia v srede musul’ man Povolzh’ ia i Priural’ ia,” *Nauchnyi Tatarstan* 1 (2012), pp. 76-99. 査読無

⑤ Norihiro Naganawa, “Holidays in Kazan: The Public Sphere and the Politics of Religious Authority among Tatars in 1914,” *Slavic Review* 71, no. 1 (Spring 2012), pp. 25-48. 査読有

⑥ Norihiro Naganawa, “The Hajj Making Geopolitics, Empire, and Local Politics: A View from the Volga-Ural Region at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries,” in Alexandre Papas, Thomas Welsford, and Thierry Zarcone, eds., *Central Asian Pilgrims: Hajj Routes and Pious Visits between Central Asia and the Hijaz* (Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 2012), pp. 168-198. 査読無

[学会発表] (計7件)

① Norihiro Naganawa, “Toward a Seaborne Empire? Bolsheviks in the Arabian Peninsula, 1924-1938” at the 44th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (16 November 2012, New Orleans Marriott, USA).

② Norihiro Naganawa, “Drawing Russia as a Muslim Power? The Hajj from Tatarstan and

Daghestan in the Post-Soviet Era” at 2012 Summer International Symposium of the Slavic Research Center, “From Empire to Regional Power, Between State and Non-state” (2012年7月5日、北海道大学スラブ研究センター、北海道).

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/12summer/2012summer-e.html>

③ Norihiro Naganawa, “Russia’s Muslim Mediators in Arabia, 1890s-1930s: Some Thoughts on a Research Agenda” Muslim Identities and Imperial Spaces: Networks, Mobility, and the Geopolitics of Empire and Nation (1600-2011) (7 April 2011, The Center for Russian, East European, and Eurasian Studies, Stanford University, USA).

④ Norihiro Naganawa, “The War on Pan-Islamism in the Multi-Confessional Setting of Russia’s Volga-Urals Region, 1905-1917” at IAS 3rd International Conference: New Horizons in Islamic Area Studies (2010年12月18日、京都国際会議場、京都府).

⑤ Norihiro Naganawa, “A Mirror of Imperialism? Muslim Mediators for the Russian Empire and the USSR in Arabia, 1890s-1930s” at the 42nd annual convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (19 November 2010, Westin Bonaventure, Los Angeles, USA).

⑥ Norihiro Naganawa, “An Embryo of Civil Society? Philanthropy and War among the Muslims in the Volga-Urals Region” at the VIII World Congress of International Council for Central and East European Studies (27 July 2010, City Conference Centre, Stockholm, Sweden).

⑦ Norihiro Naganawa, “Politika blagonadezhnost’: bor’ba s panislamizmom i ee posledstviia v mnogokonfessional’nom Volgo-Ural’skom regione, 1905-1917” Ispovedi v zerkale: mezhkonfessional’nye otnosheniia v tsentre Evrazii, na primere Volgo-Ural’skogo regiona (XVIII-XXI vv.) (27 May 2010, State University of Linguistics in Nizhnii Novgorod, Russia) International Workshop co-organized by Centre d’ études franco-russe de Moscou).
<http://www.centre-fr.net/spip.php?artic>

[le298&lang=ru](#)

〔図書〕 (計1件)

① 長縄宣博, D.M. Usmanova, 濱本真実 (編著) *Volgo-Ural’skii region v imperskom prostranstve: XVIII-XX vv.* (Moscow: Vostochnaia Literatura, 2011), 343 pp.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長縄 宣博 (NAGANAWA NORIHIRO)

北海道大学・スラブ研究センター・准教授

研究者番号: 30451389